

## 翼輪堂精神

「練心胆論」(原漢文)

士は以て心胆を練らざるべからず。心を練れば則ち智慮出で、胆を練れば則ち勇決生ず。以て廟堂の用に充つ可く、以て軍国之務に応ずべし。心胆豈練らざるべけんや。然れども此二者は、深く身腹の中に蔵す。丹砂糸布の人の手を以て練るべきが如きに非ざる也。然らば則ち之を練ること如何。曰く、「丹砂を練るには鼎火を以てし、糸布を練るには水灰を以てす。而して心胆を練るには文武之道を以てす。文学熟して武芸精し。是れ乃ち心胆之練らるる所也」と。何を以てか之を言ふ。「此に二人有りて、同じく文武の道を学ばんに、其の一人は則ち志を篤くし意を刻し、磨くに歳月を以てし、智識朗発して、而して弓馬劍槍も、亦皆其の堂奥を究め、筋骨硬堅にして、能く寒暑に堪へ、之を機務繁劇之地に投ずるも、而も迷はず。之を干戈倥偬之間に置くも、而も懼れず。此豈学熟して芸精しく、心胆練られたる者に非ずや。其の一人は則ち之を学ぶと雖も、而も心常に鴻鵠に在り。智識闇昧にして、骨力柔軟に、之をして事を治めしむれば、錯乱して条無く、之をして敵に当らしむれば、顧望して前まず。此れ豈学と芸と未だ精熟せず、故に心胆練られざる者に非ずや。均しく是れ人也。而して智愚勇怯の相判ること此の如き者は、他無し、其の心胆を練ると否とに在るのみ。」甚だしいかな、心胆之練らざるべからず、而して文武之道の精熟せざるべからざるや。

吾嘗て漁師と蟹たん丁と、鳥獸を殪たおし、鱗介を捕ふるを見る。一は則ち千尺の山に走り、一は則ち万尋の淵に投ず。皆巉巖かん洪波を視ること、坦途平地の如し。而して毫も畏避せざる者は何ぞ。平素其の術を習練し、自ら恃む所有るを以ての故のみ。賤業すら猶然とり。況や文武の道に於てをや。戚俞の二将、口を開けば則ち必ず練と言ふ、良とに以(故)有る也。或人曰く、「士人書を読み劍を撃ち、緩急必ず用ふ可きが如くなれども、而も事に臨みて沮喪し、魂飛び魄散じ、生を偷みて苟も活き、以て恥と為さざる者、之れ有り。匹夫にして目に一丁字を知らず、手に未だ嘗て劍を握らず。而るに能く大義を知り、国家之難に赴き、君父之仇を復し、天地を感じしめ、鬼神を泣かしむる者、之れ有り。此に由りて之を觀れば、人之智愚勇怯は、一に賦性之始めに定まりて、而して学と芸との能く移す所に非ず。則ち所謂練るとは、果して何の説ぞやと。」余曰く、「匹夫の、初めより未だ文武之道を知らず、而も能く義を曉り難に赴き、死を視ること帰するが如き者は、未だ必ずしも其の人無くんばあらず。然も千百中乃ち一人のみ。士人の書を読み劍を撃つも、事に臨みて沮喪する者に至りては、此れ則ち文武之道を学びて而も未だ精熟せざる也。是れ之を徒習と謂ふ。徒習豈心胆を練り、智勇を生じ、以て国家之重任を負荷すべけんや。今子其の精熟と否とを問はず、文武之道を以て益無しと為し、而して概して之を去らんと欲するは、自暴と謂ふ可し。孟子謂はずや、『五穀は種之美なる者なり。苟も熟せずとせば、則ち稗梯にも若かずと。』余文武之道に於ても亦云ふ。子以て如何と為すと。」或人唯々として退く。(栗園文鈔)